燕石襍志

弓貳

一 古歌の詞
二 人口膾炙の詩
三 時代不同歌合
四 迷水
五 一二の橋
六 房錢
七 夕立
八 匂の花
附 折端
九 狂歌
附 大人先生
十 詩歌古凶
附 五穀妻寡
土 鬼神論

巻之二止

1 5
1599
2

門15
1599
2

嬉花雑志巻之二

江戸　養笠軒　瀧澤馬琴

一　古歌の訛

新著陶集といふものの外に、桜張軍盗賊のあとよ高野山に登りしに、その外に、華嶽山登りしにとらのとし覺えれば後世のものゝ句歌とうらうれ骨堂へ投入れ置く一首御ぞとうん

高野山峯の嵐のとぐくとのとの弱れ後のうくみ

とらのみをと越うこの恨るべし　接をるに室所敷拾遺

善光院殿高野山へまうでさせゆくに骨堂へ予も存命のうちに一度参詣

むとのさまうこのうをとうつ御嵐を登りゆくとの内へ一さゝ

高野山登りと嵐のとぐくとのとれ後の世とも

ちなみに樞門貴族の孫敬をうく緑林逸首のにぞさびとちがひとの
べ侍あやまちたるかこを　かの敬なる吉利イ　ものの書光院殿のうつしとのこり
○亦近曾印行せし續畸人傳といふものの佐川田喜六あるとこれ鯉を
衛殿へまゐらす
はじめおくびやうさをぬくニどりゲ半の角ゲだてまゐるゆゑ
これも室町殿物語の冒頭叱ゲ鯉ゆゑ
の張ゆゑにまゐらせべく侍ほど
○亦借ゆの生平よりとなる古家亦紀ゆゑ
いそがぬをぬれまじりのめをを猿人のあとうちく半の
ちなみに慕景集大田道灌が歌の集に亦務え朝臣短慮功をのぶと昌黎の作り
言葉のとまらうとのそ亦書はけることのちろぞえを用ゆゑ
いそがぬのぬれまじりまじと猿人のあとあるゆゑ今俗いぬれまじ

とぬれまじりのまと紀ゆゑ
べとといふゆゑ同じぬまざまじ
とぬれべたゆゑ俗ゆゑ
たくさるゆゑ雪のゆゑ
ゆゑ山里いでまちをちまと
鈴屋翁の玉霰ゆゑ童紫のゆゑ亦萱草乃
ゆん歌霄の写の都のそらすねんとあるをすこもちぐと喝悔の道
曾人もとれを論ずて物ゆ書ちゆゑれがゆゑ贅ちゆゑ亦代を集ゆ撰入ら
ゆゑ古歌のてゆを紫を引ゆゑ或い悔ちゆゑ續人の和意をとり
るもあるべ毋のれ數学の道い深くもゆゑ入ゆゑ人の御導とる
べ毋そ只世俗の喝悔をとるを正とのを古人今人佳句遺歌をゆゑ
ちゆゑ或い寝食を忘れ或い神仏ゆ祈ゆ一ものゆゑ亦を捨も切張弧

聲にも出し人定るものなるにもゝくらゝろるく唱悟らがその歌ねしさとこそ打
あらしかなべけれ不是花中偏愛菊此花開後更無花これ
いえ種が秀なるが身まかりて其の美人に憑て後といふ字の留ぞ穏に
らぬ尽とあるべしといひてうせしとぞこの身古今著聞集にみえたり亦
和邦にも松の雪といふ歌を詠りねとく松雪と戒名はなせたべしといひて
身まかりし少女もありけりさかりし歌の詠ども知れざめて古家ありしとも
地ならず誦せられしいと甚しくきえるかなり二歌を合して一とうたふ

春の夜の闇はあやなし梅の花色も香もしる人ぞしる

とあるは頬に咄せしことをいとしく傍いたくれと是は古今集春の部に
上の句は躬恒 春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ 下の句は友則 君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る
琴を焼て鶴を烹といふべきかやいふべからん
○ゆゑくいかくすそあらね古今の詞書をひきて秀歌の本意を失へるもあり

安積山影副所見山井之浅心乎吾念莫国 万葉集巻十六
といふ歌を古今序にも万葉の随に注して葛城の王を陸奥へつかはし
たりける時に国のつかさ事おろそかなりとてまうけなどしたりけれど
すさまじかりければうねめなりける女のかはらけとりてよめる
けるとあり亦大和物語にも（巻ノ廿三葉ニ見ユ）昔安積なりける人の女のみかどにたてまつ
らんとかしづけるをとねりなりける人が女を盗みてみちのくにまでおとこ
の親にも知らせず山にのがれ住けるが男外へ行けるまに立出て山の
井にかげをうつしてみればありしにもあらずいとあさましきかげをみて
安積山かげさへみゆる山の井の浅くは人を思ふものかは
とよみてそれを思ひわびてしにけるとあり 摘要十訓抄（にも亦かくいへり）
女が三十一文字をつらねて王の怒をやはらげたると半生の情を述
淫奔をもちてその身を終るとのちにいでたる万葉古今

序よりの所が實事にて大和物語にある事しが虚言なるべく才女にぬれ衣
を着せるしめし采女なる女靈あらん大和物語の作者を恨むべし
又なべて作り物語は善人を悪人に作りなしど貞女をなほく淫婦にせ
ず懲悪勸善を正しくするぞ作者の本意とこそいふべし古今集ならき
なげきつつあらぬ難あらん歌
歌の詞書を譯して余情一下し侍らんも右大将道綱の母君の
なげきつつひとりぬる夜のあくる間はいかにひさしきものとかはしる
とある詞書なくば譯えねばあしかれど詞書を添て六倍の耳にも
きこえ易し大鏡の巻の五に大入道殿 兼家 の御子をあるは次房君は
陸奥守倫寧ぬしの女のはらにおはせし君なりみちつなときこえさせし
西洞院なるが右大将かけたまへりしこの母君きはめたる和歌の上手にお
はしければこの東三条どのの我がかよはせ給ひけるほどのことと歌など

かきあつめてかげろふの日記とかづけて世にひろめ給へり さては
晴したり寄る門をも遅くあけければわびしくそまち入させ給ひ女君
なげきつつひとりぬる夜のあくるまは 云々
とよみたりと出しし
げにやげに冬の夜ならぬまきの戸もおそくあくるはくるしかりけり
さて此の歌のこころなどよく門をとくあけねぞと腹たち消息せられし折に
歎きは添ひとり寝し待つ夜のながきさへ只今のあしたを待ちわびたり
ましてさるをとはぬもありしとあなしかれしこの道綱卿の母君の歌は
百人一首にも入りて婦幼もそらんじ口ずさむなるに書つけしかば今は
解をきかずとしてよくしるべし

㈡人口膾炙の歌

陽春白雪の曲は世俗較近ましものなく巴人下俚の類に至りては和する

あしくはもとより一唱三歎もとうべきことなり信言不美。美言不信と
老子もいへり夫燕雀は大鵬の志をしらずと庸人は聖賢の言に通ぜず
歌も又しかるべし古今の歌は世俗の耳にきこえねばにや生れ出よりつね人
和哥連歌はかなはずとも秀逸にあらずとも一犬形に吠て群犬声を吠せ
これもしらねばすゞろにこれは竹の集にみえたる竹人の詠なりとあるも
更に稀なりとうち出るまでにて註せよ

らんすゐもらくよのも玄番よみかけて後はよくよく詳らかにせられ

相摸國新井ノ城主三浦義同入道道寸辞世の歌としる人永正十五年
七月十五日に討死せしとかや鎌倉管領九代記に見えたり

金ひらか湯の湯にても湯にけふをとするとえしかめは山田え

浴川百首題狂歌集とあるものも集は寛文十一年五月の比印行せり狂歌
八百首建仁寺雄長老明心居士貞徳安井ノ意斎竹猶彩布留田道

平郡實柿ホも判の詞は中院也足軒かきしかせし今俗の夢は是なり
さあるべりとするものは貧の正首と詠まり

益八をとらへてかれがこふなり

これは宗鑑が犬筑波集に切ても切てもすとたに前なるに附は
あるべ貞徳の淀河（犬筑波集也もきいら新撰）に茅二句に隣の藪の竹はそられぬと詠
て自注に筝ぬりんをとらへてこれが隣のきとるんある筝をとるなりと
せり世俗のもてくる口順ともる所ろれしるに過て風雅に志らきものゝ俗を離
るゝを和意とすべし

㊂時代不同の歌合

左　日本紀竟宴各分史得大鷦鷯天皇　　皇太后大夫藤原朝臣國経

田かりるすゐ世どをめぐみしすめらぎこそ世をもとしさかりいかしろしれ

右　一條院をまきまゐらす　　後京極摂政藤原朝臣良経

世はふべき袖もあられぬ世の中に寒さる民の冬のよるよし

十訓抄に云く　仁徳天皇ハ三年の間みつぎ物をとゞめて民の烟の賑へるを悦とおぼし　一條院ハ冬の夜御衣を脱て四海の民をあはれませ給ひしりおはしましけるとぞ仰られける是又賢王聖主の普き御恵を黎元黔首までに及しおはします古今に不易なり君ハ民をもて躰とすとのたまふ王ハ兆民をすくはんとておもひやりおはしませバおそれを顧ず給ひさらん近くハ後京極摂政のくぞくとこそおひけるおぼしめべき云云本續古事談に帝王ハ人をあはれみ民をめぐみおはしましけるべきなりされバ　一條院ハ極寒の夜ハ御衣を脱しのけさせおはしましけれハ上東門院なども寒くハおはしまさぬかと問給ひけるに日本国の人民さむからんに我かくて温くるハ無慙のことなりとぞ仰られける　延喜御門もさむくさゆる夜ハ御衣をぬぎて夜御殿よりなげいだしおはしますとのひけるとぞ曲亭子云それがのぞとくべし

て民の竈を賑ハし御衣を脱て民の寒さをおもひやりおはします御仁慈ぞかれを深くおぼしめされて浅しと申すべきも恐なれど世俗ハ只　延喜帝の寒夜に御衣を脱のふらしをまうしたのみ　一條帝のみこゝろをたうとみのあまりハいかによぞや愚按するに是彼久しく傳ハりたる欽古事談に　一條院ノ御宇。源ノ國盛任越前ノ守ニ。其時藤原ノ為時。附テ於女房ニ獻レ書ヲ其ノ状ニ云ク。苦學寒夜紅涙霑レ袖除目春朝蒼天在レ眼ヲ。云云　天皇覽之敢不レ羞御膳ヲ入テ夜ノ御帳ニ涕泣而求給フ。左相府参入知テ其ノ趣ヲ此ヲ忽召國盛ヲ令レ進辞書ヲ。一本書テ二有僞字為時ヲ令レ任越前ノ守ニ。國盛ガ家中上下涕泣ス。國盛自ラ受ク病ヲ。及テレ秋ニ雖レ任ス播磨ノ守ニ。猶依テ此ノ病ニ。遂ニ逝去ス。云云。かしこきかな傳ハりやまりて　一條帝ハ寒夜に御衣を脱せおはしますとまうしなせるを傳ヘ誤まるならん醍醐院のみんなもまさかりあやまてる哉大鏡二之八第五張にも　延喜の帝の

寒夜に御衣を脱たまひしみこゝろ浅からし

左　よみ人しらず
古今集又見于伊勢物語亦大和物語下巻女郎花物語中巻

風ふけば沖つしら波たつた山夜半にや君がひとりこゆらん

右　よみ人しらず
大和物語亦見于十訓抄巻十第七番女郎花物語巻第九叢

これもおなじうたなれども人にとひられし今ひとつなるこゑをのこさけ
左は古今集に貫之が云ある人いふこのうたむかし大和国なりける人のむすめ
にある人すみわたりけるこの女親もなくなりて家もわろくなり行あひだ
をとこ河内の国に人をあひしりてかよひつゝかれがちになりにけり
さりけれどもつらげなるけしきもみえでかうちへいくごとに男の心のごとくにしつゝ
出しやりければあやしと思ひてもしなきまにこゝろやあると思ひて月の
おもしろかりける夜かうちへいくまねにてせんざいのなかにかくれてみければ
女物いたくうち歎て琴をかきならしてこの歌をよみてねにければ

これをきゝてそれよりまたほかへもまからずなりにけるとなんいひ伝へたると云々
按ずるに萬葉集にはこの沖津しら波立田山といふうたはみえず妹がみ
ことはをよめるをとられ見顕昭はなぞらへしら波をむかしよりぬす人のな
にいへるどもれはさだかならずとみれば沖津白波といひ沖津白波といへる
とも風吹かばといへる序歌なりといへり
右は大和物語に云大和の国に男女ありけり年月かぎりなく思ひてすみける
をいかなる事かありけん女をえてけり猶もあはれとおもひてこゝに
をへてこをしてみるにまぎれずみえけり

あらはれてぞ人に云云とよみしもあれハかぎりなくめでたし今の世をぞ
妙く思ひてものどうかんをみるよりある曲亭子云婦の嫉妬なれども
拙を掩ふといへど二歌ともにいと情ありし或ハ夜あくさきそぞ男のあだ
ごころをびうらうちそく恚るなるらんかをとらひ或ハ壁を隔て後妻とよむ
なども嫉ねん僅にてそひとめぐをつらねてをしところなかりけりそのなかや
すらつをもらしたるハいとく育ぞさぐるべし世俗に伊勢物語のみをよんて
大和物語のみも又かかる貞女の歌をよみしるもあるをもしらぬもより今一番の
歌合にとまるものハ大和物語女郎花物語ホムらの二タ歌をとるべきなるもし
かなしく思ひ楽しく淫せん哀しみて傷らんとかかるたぐひをやらふべからん

四 逃水

夫木集第廿六雑部八俊頼朝臣のうた

武蔵野にありといふなる逃水のにげかくれても世をすぐすかな

この逃水といふものハ實の水にあらで春の曠野よりうつりたちひをなして眺
むれバ水の流るる如くにみえて向ふをいそぎゆけバなきものにて野馬陽炎を
そまふたらひなるものゝつらく根く所あるなるに妙を

性霊集詠陽炎喩 見于巻十第六十二張

遅々春日風光動。陽炎紛々曠野飛。挙体空々無所有。狂児迷渇逐忘帰。遠而似水近無物。走馬流川何処依。運散註。智論曰。飢渇悶極見熱気。野馬謂之為水。疾走趣之轉。近轉滅。走馬流川省謂陽炎状貌也。

逃水のことハまことに審なり俊頼ハ空海のうたによりてつくりたるなるべく

五 一二の橋

其角が五元集にハ解りてたる発句多かりけり俳諧者流これを註し探

出るも亦勝れるべ

ほとゝぎす一二の橋の夜あけりかとうの花白い鮮げなるわ

らねなこの一二の橋を江戸本所なる一ツ目二ツ目の橋なりとなの人うり

なるとなく一句はなるべき甚角が發句い格をとるべき新声なりと

いべども此名を私なりにぬぐいつゝべくべく本所い昔より一ツ目二ツ目と唱

く一の橋二の橋と呼なるなるべく按ずるに一二の橋い山谷通深草に有

雅別府志第九巻古跡門下に云。月見岡在伏見源平

盛衰記云。源軍或自伏見越尾山月見岡到法性寺

一二橋云云山別名跡志巻十二云。一橋在東福寺北

門北一町餘伏見街道中央従此南方東福寺境内

凡八町内有二橋。是其一也云云。曲亭子云法性寺い東福

寺北門前の有。西行よりの盛衰記に法性寺の一二の橋とあるべしと

とのこと法性寺の境内に属するべしと甚角が發句の古歌とな

り拾遺集に壬生忠見が

ゆづくるに啼くもくらんほとゝぎす淀のこゝろの夜ふかなる

と詠ぜしを見ひらくに大抵ほとゝぎす淀の夜ふかなる

をもとぶ夜明かなるなるも深草や東福寺のほとりなる一二の橋を

潜るこゝろ明ぐるべしさぶ淀のそい夜ぶかなるべし杜鵑も一二の橋を

い横雲のひかるに一声二声聞とゞれるなるべしと求めべくべくたちもと夏の

夜の短さと旅泊の餘情とに貌象をなべくべく亦晋子が

いづくにか淀橋あるべほとゝぎすと咏ぜられい江戸四谷の西なる

淀橋を淀のこゝろにひらくたりとい聞えなべく一二の橋なるべ

聞ひらくに水も浅なるとこと

(六) 房錢

世の集才

窓銭のうた世をそるの人雪見うた　其角

或説よりぶれの時このあり名窓一ッ日月二百文の課役をあてら
れてるゆゑりとれを窓銭とひふ其角がうた世をそるの人雪見うたと似り

いとれくとくりとの窓銭のゆゑろはぐ〜さる制度ありといふ〜いくえて
所見るゆゑ〜ゆゑのゆゑありとも雪見うたい月えんともそぐ〜北窓閉るといへぐ
十月の初て冬い窓を閉る〜隙りる風を厭ふのゆゑりていとの蔑白をや
水拙〜按ぐ〜の窓銭い房銭を悔る歟其角が緑草まい假字まそヤド
銭と書るやをマ水悔ゆえ真名ゆ窓と書る〜印行ゆ〜ゆえれをぐ
ゆ〜ぐ後人強〜とのゆを狂ちんとそ秘音の説をるとゆとゆ」事物
紀〜爲ニ因。放房銭宋朝會要因。大中祥符五年正月。以
雪寒應店宅務賃屋者。免徴銭三日。此雨雪免房銭

也始ッ也。七年二月。部貧民任官舎者上週冬至寒食免
徴〜宜三日。此節日放免始メ也。其角いこの故事をこりて
雪を詠ぜ〜るゆん房銭い宿銭ゆ〜賃屋い貸店ゆり徴銭徴直とを
水債銭のゆるぐ〜宋の大中祥符五年正月雪のいく〜寒い紙をあく
務賃屋月の三日の徴銭を免しあひ〜とく異朝まいゆ〜あるゆり
ゆ〜と今降る雪をえ〜ゆゆ〜ゆゆ〜ゆゆ句意あゆ〜ゆゆり

⑦ 夕立

元禄六年六月廿八日其角が三圍の神社新雨の蔑白い世挙て人のゆる
ところ〜其角が自筆の短冊三囲編笠列挙真禁院什物并ゆ五え集ゆも夕立やと真
名ゆ書ゆゆゆ〜世の人ゆれをゆ〜ゆ〜ぐちやと續いゆるぐ〜ぐ

夕立やゆ因をみあぐりの神ゆ〜ぐと續ぐ〜ゆれ続則ゆりある人ゆれ
難ぐ〜夕立い一句の題ゆ歌を用ゆゆゆゆゆぐやと続むゆ俳例ゆ〜と

さればこれ亦揚て五元集にある禱雨の發句をあるがし云る前に市中句
雨といふ題によりて
　鳶の香も夕ぐれかかる腥しといふ句を載られ夕立ハ題なくして
ヽを用ひて夕ぐれなりと作るなる禱雨の發句も夕立ぞやと続けしを
あるべし禱雨の古歌に天の戸川のひくちあけたまへ小町と詠し苗代水にせき
くだせ能因と詠じし歌得の手本をさとさす夕立ぞやと詠と見ハ既
にその雨の降るをいふべしかしてこれ禱雨の發句と称すべし美濃の雲裡が俳諧論
といふものにこの句を評しとちの俳者常に大酒にて酔てもその見ハいなく酔
たりいくて酔てまた酔も知らずしてそのいへる虚も虚なる故に天稟の趣
向をうしなひ天稟の趣意なきゆへ感應の大雨ハ降されども晋子ハ一生との
意を知るざりしも知るべからずといへるハ備前無人の大言といふべし按るに
この句ハ晋子當坐に沈吟苦心してかくるなるらん歟それいふにとひ亦一
句の玄妙なるといへバさもとられを吟ずるにゆたかといふ折句なり五穀豊作
を祝して五七五の上にゆたかとおきたるの奇なりて亦少なからずやり不用
意にてこの句を得るものなれバ其角ハ實に俳諧の聖なるものといふべし
いなく後生凡庸の批判もさぞ及ばれまじと五元集にハ甚白雨とあれど自注せ
ざるハ偶然なるらん歟旱霖ハ人力のおよぶ致と所にあらずと王充が論衡
にあり明雲篇を披閲ちへちらんそれとすれバかれ世にこの句を評を
るもの読劇をえらむど本歌あるを知らん　金葉集林円法師ちはやぶる神の河なるなかれをもあまくだりては神ぞ亦
あさかといふ折句あるをとらどもして無用の辯をふるんハいかにぞや予五元集
類拌子亦それえる發句の殊に解しがたきものを抜萃して是れを注せ
んと思ふゆえしあれども近ころハ予が本来の志ならぬ役を物語の三行
見て書肆の請求にまかせ思ふにだもおよばれなくて今はまだ僅かにその両句を
あげ暇あるときに別に草をおこすべし

（八）匂の花 附 折端

俳諧の附合に名残の裏の花を匂の花といふ何の故にかゝる名あることを
しらず予総角の比俳諧師にこれを問しにその人答て一坐の連歌名
残の裏の花前に至れば宗匠立て香をたくことあり故に匂の花と称
ふといへりとてうなづくとをしへぬ又一人に問ば名残の花は一巻の大切なれ
ばそのめぐり未練の作者に附るを許さず此花一句をえらびて発句なり
かくの故に匂の花とぞいへると答へけれどいづれもうけがたき説どもなるや
疑しく覚へし乃年長て思ひめぐらせば韻はにほひと訓ず匂の花は百
韻満尾の花なるべし静斎老人随筆に匂は韻の省文なり韻韻同字
なる韻をにほひとは訓ぜしならん流風餘韻の韻の字をにほひと
読べき程なりし古人訓釈に心を用ひしを推量られて感じ侍りし
よりて此乃連歌の附合長短百句に満るを百韻といふ韻をにほひと

訓をとめて名残の花にこの月あるゆゑその韻満尾の花といふべきを略し
て匂の花といふなるらんと思ひめぐらし解して人にも語る説ぞ今按ず
るに自他の説さまざま非なり物の尾に至て此乃つかふ尽るを匂といふ旧家
の説に従の盛なる句ひといふは是が真物などの意で初のほどの香気は
しづまりて末に至る程のしとその香ちりくなりて香気消失るなり
盛色の匂ひもこの意で何色にても紬草摺の上の方は色濃それより段て下
に薄くなりて果は白くなる何句といふ如く焼刃にも匂といふなり
亦婦人の眉をつくるに黛の薄く散る所を匂といふとなりいづれも右の
意にて名づくるとなんあれば匂の花もこの説に因て解すべし一巻の花
ここに果るをあかしくにほひといふなり
○亦俳諧の附合に裏表のをくりの短句を折端といふ何人か初て唱へ始め
たるかしらねども元禄以前の名目にあるべからず然るに先の短句を端

とゝ〻ゆ落着ちぐさ名月より字書よ端い首ゆりとゆり正月を端月と
いひ初の五月を端午といひ事のそぐめを蔑端とゆ和訓ちといちぐめのめ彼
界ちかさ翁のそ〜めるべたちゆどいかちもる端よ〜翁のちぐめゆる
べたそめちさんび折端といふたいい折のちぐめ今ゆ裏うりの長名み
どを折ちとゆ喝べけん當初穿鑿足らざるよ似ゆ
周いゆ俳諧四季の翁ゆ名のゆ正月の部よ三ッ物貴といふものをゆぐ
ちり予曩よ俳諧歳時記を編輯ちとたれを削去らんとゆ思ば
予が意を猜ちるゆのい漏ちちとちんゆ〜莊ちんとゆれば忘むべた
ちら妻りりゆ〜舊よ傲ゆるとたれを載ゆたれ三ッ物ゆ蔑名脇才
三ッゆ正月の部よ入ゆたるい歳且の發名を家とゆればゆゆの三ッ
物貴といふものいゆその野鄙ゆるゆゆめべうもあゆど實永の比三物貴と
ゆひえ緑の比前名拾といふゆその難春臺独語よんえゆり玉津嶋の

神の御濱ゆ下ゆりえん今ゆゆの絶ゆゆゆの俳諧者流ゆまゆ
とゆふべ〜

㊈ 狂歌 大人先生附

後撰夷曲集の奥書よ狂歌い世〜の撰集よ夷曲歌とゆゆ〜狂歌と
名付〜ゆゆゆ〜ゆれを狂孔狩猟のゆよ比ちを遥恨のゆゆ増ゆよ夷曲の
曲の字を枉よ書惜ゆゆれを亦狂の字よ続惜ゆゆ〜狂歌とゆゆ〜ゆ
ゆとゆり抜ゆるゆの親迂僻ゆゆ〜信用ちぐゆ古今集の誹諧歌續詞
拾集の戯笑歌その名月い異ゆれども夷曲歌ゆ後世ゆれを狂歌と
いふゆい夷曲の曲の字を枉よ惜ゆゆれを亦狂よ惜ゆ夷の字を喝ゆ
狂歌と唱ゆるゆゆ〜ゆ唐山よ俳諧體の絲を狂名狂歌ゆどゆゆ明
劉伯温ゆ連珠よ狂歌之士遺世若草莱とゆゆいられゆゆゆれば
翁よ狂歌ゆよ別ゆゆ〜和歌よ亦狂歌とゆゆゆも嫌ひゆゆと夷曲戯笑

を　天朝の名月の俳諧狂歌い唐山の名月より異邦の名月を
ものぶ古今集より諧謔（諧俳音通）歌と出されしを作とういんすを思ひ
東曲歌を狂歌とらんも嘆ふべきなるべし
○ある人予に問今の狂歌者流相共に先生と稱し大人と稱を世俗先生を
大人と優ものとものとの稱呼その甲乙を問へとの予答れは答て
いはく書言故事に稱年長曰先生韋昭辯名古者稱
師曰先生論語憲問篇闕黨童子將命或問
之曰益者與孔子曰吾見其居於位也見其與先生並
行也非求益者也欲速則者也これ先生その師をいふ孔子
字篇子曰後生可畏焉知來者之不如今也四十五
十而無聞焉斯亦不足畏也已後生少年をいふ十五十
六の年既に長ずる所謂先生なるものなり亦大人書言故事子稱

以曰大人僕霍光霍去病弟也父中孺平陽人以縣
吏給事平陽侯曹壽家與侍衛少兒私通吏畢歸
娶婦生光閉絶不相聞不知少兒已生去病後去病
為驃騎將軍擊匈奴至平陽傳舍遣使迎中孺跪曰
去病不早自知為大人遺體云云
〇大人といふ亦孟子の大人の德盛ありて文明なるものをいふ孟子
盡心篇孟子曰有大人者正己而物正者也朱子註
大人德盛而上下化之所謂見龍在田天下文明者
亦滕文公篇有小人之事有大人之事且一人之身
而百工之所為備云云此亦君子と大人とを漢の時商山の隱士自
負里先生と稱諸葛亮南陽の畊ちとて梁父吟をうたひ臥龍先
生と自稱せり但大人の名稱ありてもいとも良稱なるものを勿論

大人の稱呼先生より優るとなし亦按ずるに皇胤紹運録に武内宿禰の孫平羅真鳥のみこと紀大人とかゝれたり亦平治物語源平盛衰記に帶刀先生義賢あり併られたる名と職とを稱するのみにて大人を生と同じくこゝに大人をうしとなすべきか日本紀にかゝれたり

○捜神記云舊說太古之時有大人遠征家無餘人唯有一女牡馬一匹女親戀之亦是大人謂有威權者也見干卷十四

(十)詩歌吉凶立觀妻事

賢者之言曰禍福將至善必先知之不善必先知之故至誠如神信哉言也氣之動物物感人搖蕩性情形諸舞詠嘿燭三才暉麗萬有靈祇待之以致響迎禍福不招而來謂之天吉凶不求而得謂之命

或謂吉凶前定或謂禍福無門夫命運非人所能也而人能致之致之未悟身枯人始悟不亦遲乎

○本事詩曰劉希夷嘗為詩曰今年花落顏色改明年花開復誰在忽然悟曰真不祥欲復遘思逾時又曰年年歲歲花相似歲歲年年人不同又惡之或解之曰何必甚然遂兩留之果以未春之初下世

○崔曙進士作明堂火珠詩贈帖曰夜來雙月滿曙後一星孤時以為警句及未年曙卒一女名望星人始悟其自讖也

共載于廣百川學海

○歌をうたふことをよめるなりいにしへのうたはかくのごとくなるうたひとの紀をうつもつゝしまれ〳〵しくなれ〳〵しくなることをたゝちまちまちなるいきをつくめ海ゆかれゆくりめの雨中吟とそゝくうめくねうとの不

むかし定家卿さぶらひ給ひしもとに
宗尊と申ありしは後嵯峨院のみこ
ひうとのさねあきとを養子為家卿いとめ申されしうけるとして
陸奥のくにみちのくの国世のうれひ出来てかちひられぬべきりゝとき
ゆゑ侍りしとぞ

○ことのこゝろひらけしむかしは今はねぶとのあのうの世の中
うれは東方朔がことばか用之則為虎不用則為鼠とのこゝろ
なるべしゆゑなくして人のことばのをそれをもうくたるゆゑなるべし
もべたるものとそ異本女郎花物語 亦一説に宗尊親王百首の歌をおもひて
為家卿判せしかはしとの虎とのをそれの歌をいとゝ悔まとも
こゝ侍んものうく意なるべしと練ましされしの果ていまさらの世の穢のそ
ぬきうるもうらみも侍りしもうべなりとぞ

○光厳院の正慶二年春二月のころ東軍ふ敵破の湖を攻ねく後
然るにんざりしうば寄くまの陣中に連歌を興行したりける義貞長崎
九郎左衛門尉師宗「さそうけてあつまるよ山嵐とたゝをエ孫次郎
左衛門尉「嵐や花のうたれるうらんと行うたられを関へ飛弾丸
ふ軍ふゝしうじ嵐をうけて敵に花を味方ふるぞうらるゝ

○不吉なりと咳ひり果てその軍利あらぬ大軍いらぬ小引退くのこゝろ
ふゝ夏年五月廿二日に至りて高時入道孫舎に滅亡せり

○近世松崎蘭如といふ人の大腹と肩と服と通ぜるようして脳髄の
歎且ふ人忌べれしとある人ひとりとて太腹と腹るとも何の禍おくんとて
大あくや二にこちあうど寿福禄と喰ぶしてその年数孫の慈ふ
ふ服をとうるとこ二度ひとしひ代へたり

○平ぶ物のこゝろ世ばえるこゝは安永九年の歳且ふ脳髄師葵是が

何の式なの式りすゝ宿の春と咏じてこれを学く人凡彈しとそ
甚しく紀警句をしるゝ世よ立ゆゞらんぬ隱者ありともこの世よあゝんりのそれ
形の式ゝりゝどやいと織たりゝら果ゝくその年身やりりぬ

○亦天明の年間俳諧師存義が歳旦の發句

信濃なる濃黄布ゝやゝ男と咏じけるをある人難じて浅黄帋子
ゝ凶服なりと論じ紀發句なるとゝ嘆く初よりの年存義いむるゝなり

○亦天明五年俳諧師蓼太が歳暮の發句

うれえちも貴き石あり年のうれと咏じゝ次の年身やりりゝ
門人某甲子ゝの物ゝりゝ師去年の暮貴き石ありと咏じん
今茲墓碑を建る前象なりとゝの三人母ゝ稀石よ見ゝ義ゝ
うれいをゝくもゝゝね齢なるべしゝのゝ嫌忘よゆゞらひゝく難亀のめゞる
ゝゝ紙ひゝるゝべんもをゝりゝれど假初よゝ捨ゝる歌連歌も時ゝりゝ人

めゝるゝよりあり安永乙未の春ゝ乙未のゝ春ゝ兵法發會の日ゝ人
とゝりゝを南の五七五のをゝりよゝ死ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ老の極
と咏ゝゝひゝりゝの年紀生の末の六月よゝくゝを失怙の憂あり

亦寛政十年の八月八日家兄病中の作よゝゝ秋風や蛾をまゝらの
蓼の雲。とゆえゝくゝれゝゝの蓼ゝゝ柳や春のゝ紀の蓼ゝ年。と作ゝゝ一射
の題南ゝ蓼の陰とゝゝ紀ゝゝと南れゝゝ手雲ゝゝの字をゝ忘ゝ蓼の陰といんを
ゝ紀ゝひゝくゝゝゝるべんれとゝらゝ紀ゝりゝるゝゝの南竟よ辞世とゝりよゝんべ母ゝるゝ悲ゝ
○人間一生を五十年とゝて十五歳ゝゝ養路をゝる郷ゝ殘ゝて三十五年ゝれ
夜ハ風ゝゝ人事を笑ゝどゝれを直疾よ刎ゝるゝれ僅よ十七八年ゝる紀
ゝ限ゝる命をゝゝ一月半時ゝゝゝゝゝ過ゝんゝゝゝゝゝゝ紀ゝゝゝ
どゝ且食ゝ不の米ゝゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
白米三合とゝゝ拾六石二斗十六歳ゝり五十歳ゝゝ一日の食白米

五合とうんぬん六拾二石と統計七拾九石弐斗とれを三斗五升俵ようへ
弐百廿六俵壹斗ようべへ縦六十ようべ生るとも三百俵の米を過ぎど彼
晉の陶潛が五斗米のわるを播を折めどとゐる隱逸を做ひどともゆだ
るべの米を食んとうへ小利を貪へ物めうづひへを物借てもその朝
を後るへゆめへ衣食を奢ると活業を懶るとの油斜ようべへさう
とと食ふ所の米ひへたくもあへべとも終へ皆辛苦へて転耕ちへあ
る我が身を安坐へて飽ゆへ食めゆとも井のが天稟の禍のをふあ
らべをみられ有へ死　聖代を生まひまりをの嗚る日とも
荒彼峯のちげ死とのもの孫る隈なく　惠ちあひとみるのりの未ど
も潤ちべ濁らど道を遺たる我拾とへ疾もを積ちべとのの和漢の
ひへへゆもゆへくとれを仰げばいよへ高へをもも忘ぢへと身の
ぢどへを勉へべ二百廿六俵の米を行んを若へべへて耕ちへどうん

廬山の常言を生へへ食べ山も空へとゐへ泰平の民い安死をるを
岩を行ぢ渡べ見ることをたへべる我ををその志窩をの稀ようへ寛永へ
ちめ八十めをりをへへ年を後死義をりをを毎日を畑をを耕えへ
天下泰平とのを禱をへべうを死とべへあぶ笑ひへ嗚呼を義ちあ
へを公事をめはたらふをもをへへで井のぶ孫児の禍い欲ど天下泰平と
のを禱ることをををわどひへべ義ひらへへさんべとをうれいを祿慶
長のをを壯年とへへあるとを死い夫面をたち又ある時い自分のわをを心滑
生辛どへ生延たへめへ長閑死まをををあひをりいと安らふをべども孫ども
を艱ふらへを代方代の後生ぐもめへことをあへをを時へとをあるをたえと
願へ死をのへへとへへをりとぐ荒を逐生をるりの画る荒をえへいへへ
世をれへをりとへへ牧経もこの義が新をるべへ
○二百廿六俵の米をへへ出をりへとあり今人米銭の妻女を操をるとを

高何石何斗と書この高は高ゆの義なれども孟子に五穀多寡同則貫相若とありて高の訓と寡の音と近きをもて字のを備りて高と書欤孟子の寡寡はみな

㊤ 鬼神論

鬼は大陽の精なり故にこれを陽の鬼神は陰陽の義なりと王充論衡にあり亦史記黄帝の本紀の注に死而不亡謂之神死而不祀謂之鬼とありて思按ずるに神はひなり鬼は気なり人の心気は秋なり鬼神亦秋なり人の気はいかに眼目の視るあたはざるもの幾億万人世間鬼を王充は人死して鬼となるべし古来今往死するもの幾億万人世間鬼を若し悉くあるべしとの論いまだ盡さざる欤人死してその魂魄幽昏とかつて人の眼はあたはざる間は寛鬼とあるべし我俗これを

幽昏といひこれをこれとこれ雲霧の如く雲と霧とは天地の気と天地乃気なる故に形なしその形なしとはいへども聚るときは人これをこれとこれをこれとこれども散じるときは絶えて跡なし気息は人倫鳥獣の呼吸なり故に形なし形なしといへども天寒きに朝は人これをこれとこれども隨て滅と寛鬼の人よりこれもその魂魄いまだ散ざるあるべし其人死して鞍の手を強たらんは魂魄既に散滅して寛鬼となるべしとかたらんと欲するともいまだ消尽狐狸の妖怪のこれをなすの迷ひ塩尻云。玉笑零音云。人之初生以七日為魄人之初死以七日為忌。一魄而一魄具矣。一忌而一魄散。故七七四十九日而七魄散矣。故知鬼神之情状。とかつらのくに亡者の追薦四十

九月すゑつ止この日七魄散ぜるが故なり散じて後本聚ることなし壁に春の
氷の解るがごとくその解んとするとき先づ碎けて水上に浮かびのぼる人死
してしばらくもその魂魄いまだ散ぜざるが如く氷解て水に帰し魂散じ
て帰と寒鬼に碎ける氷の水上に浮の類なれば鬼神も滅ることな
り寒鬼の説証ずるべし今を辺の一僧祇店に于て
始りて易経を購ひ求めて披閲するに朱をもつて点を
注せるその説一つもとるべきなし僧堂を拍て大笑あざけ笑ふ
夜俄頃に発熱して痛しく病を五六日ほどして死んと云又某の坊に儒者
あり一夕その門人某生忽然として儒生にをそれ物あく
怪をなすいねる月黄昏の客となりたるにあらずと問ば門人のこたへ
ちうさとりふたりしらべ今何の故ありてかく物をちんと研且門人
うち微笑して易経注ちんとして妻年若くして先生こ

れをこ坐とべたりしに先後ひとつ日もあらずして妻ありて生んだ
所易の書籍を賣りて易の母が年若くまのれたりしものなれば
ひとりに某の院の僧祇店に于て彼易経を購ひ求めて説一つも
とるべきなしとあざけ笑ふが情なしば矢庭に渠が頭を打て懲らしめる
五六日を経て彼僧今二日ばかりあるべきと死とべし先生
なほ托して責傷が病牀を訪ひ面あたりうちが打懲らしめをえず
おのづからとのあるに儒生ひとりこれを呆且しかくるに憤をいきどほれど彼
僧いまだ原来怨なし其の言の安穏なるを外にしてこれを殺さべ不仁
なりや身を殺して仁をなすとも子がごとくいかんとせんとすれば
ちうとして諭さべ門人ならず沈吟して先生の言固よりさることもとれん今
その處を失へるをもつて彼儒生ひとりこれを殺さべ
墳墓を建立してなほとべ其処に處うとしたりけるこれらへ

はくうれ沒んぬるよえうどさうねめ〻と儒生八次の日徒寺に至りて〻絆の
慈を告るよりこれが備はるて〻墓碑を造立して〻
叮嚀に読経するどとる招く〻病母に捧てとりて〻後遂に禍なりとなりて
怪談とるとなりども更に例の俗に物うとりあるべきことをもむかしの
てこうりしまどもはくうあるの異妻に相別をてちのびくるあるひふ
うれが嬪妻これをねくしとりの行くに死をてみん夫の出る隙ふぐ
立りあるつまを刺とろし二ツあるるをを刺んとるとれ夫の毋外面より入り来
るこの景迹をえて〻大に驚れ矢庭に小児をクれ抱れて又外面へ走り去
みれがもなぐ婦い忍に自殺して〻先にれあるを〻夫も母ぐ悔を
悔て〻妻の枉死を哀み後のゆるどはるほどに稚児を艱みとんき
うりしが辰こるの親族のうへ遣して〻絆の母ちあるまぐともゆ〻也て
艱育てゆうれと頼み聞ゆるに推辞ぐて〻家に母ぐどいちぐ嫁らど

孫とりのうりしぐ近隣に小児あるゆ乳汁を乞て両三日飲ら
に彼親族の女夕られに浴室より出るとて途に彼稚児の母に逢ひぬ怪しと
母ひて〻ねをもねいとて見でやに逢るとこや〻と呼びとぐ児の養
育浅ぐるをとろうべはえちぐ〻ぬん身が體を貸て〻ありれとい
て怪〻れ限をうれど母とろしとるとも〻りと張ひて家に走る
ゆりしがその夜俄頃にちぐて次の日も起ど殊に怪れ彼稚
児が啼泣ぐに病人られを抱れあげて乳を含とるに是ぬられど乳汁
出んとろうげに吸て飽とあるが如〻ものとの児を賺〻とするに
い声音も面貌もその母に似うり亦稚児のて〻眠をるが如ぐとれ忘れ
るがたくて物のひざるも舊の如〻怪んるのべるものるねばその思
のえるも絆の慈を告ちし追薦の仏事を叮嚀にとり行ひ乳母去
て彼児を艱育ちて〻女の病ひも遂に癒てうり後にえて〻怪〻とれ

年もすでにしとぞある人むかし目録をつくりしとぞコヤ一ねあるべし亦
いぶんのかん時いぶんの里の中忘れよ市人の妻にあてこと生りが
産後逐日肥えぶとりて乳母にて家にて難育しぬべ里親などいつのうち拵遣ひそと
遺言をつくりれど原来富あもあらねば乳母を難んずうして里子と
いつのよ遣をなすに一宿伝強て里親その児を送りつくりあて
三度ほどびしいぶいと落とひとりいるなくなるがをつくしあるど
関ほ里親答えこの児貧いうく移りれど依い通宵泣く暁ほ及べ
そをの啼とれ雑といちどに外面ほ女の声して児の名をほびとべるし
やい怪しんるのあるかふくしまいしまるこそとしいしに又い怨り
悟りてふく悲こられうく人の乳をあらひたそその児を育るほ怪しと
思ふあるいとこいきるに子が親くきあるとあるいで一事も文を餞

らんいれば世ほ寃鬼はひいひぐと或い書籍を乗悟して或いこのるほ愛
着して魂魄いるく散滅ちびいほ解て声と形とあるが如しあるいとも
魂魄久しく凝滞しるあるいるびををりて後逐ほ怪こそ寃鬼を臨
終の餘煙ありこぶりあて寃鬼とするのほあるべ王充が論ほ鬼ハ
人死してなるのほあるべといのも不可し仏者の説ほ鬼ハ人死してなるの
ことりふも不可あり鬼神ほ二つあり天地ほありて陰陽とりて萬物ほ生れ
を死生といの人死してその気散ざるを寃鬼とひ陰陽凝滞して頑な
らざるを疫鬼とりハ孔子曰。鬼神之為德。甚盛矣乎。視之
而弗見聽之而弗聞體物而不可遺。使天下之人齊
明盛服以奉祭祀洋々乎如在其上如在其左右。詩
云。神之格思。不可度思。矧可射思。朱註程子曰。鬼神ハ
天地之功用。而造化之迹也。張子曰。鬼神者二気良

能也。朱子謂。以二気言則鬼者陰之霊也。神者陽之
霊也。以一気言則至而伸者為神。反而帰者為鬼。其
実一物而已。亦曰。鬼神無形與聲。然物之終始莫非
陰陽合散之所為。是其為物之體而物之所不能遺
也。とのつり聖人鬼神の徳を称して其上に在が如く其左右に在が如し人
實にその上にあり其左右に在るなり。これを祭祀とは在が如し人
の寛鬼疫鬼をつるも亦あるの如しその気に触るゝとは眼前に在が
如し水火は原形なれども人火の燃泉の流るゝをつる風雷も亦
形なれども人風烈雷鳴するとその声を聞寒鬼の説經などゝ
仏説いられは人善なれば天堂に生じ悪なれば地獄に墮るのいられ
を餓鬼とつの和名鈔云。孫愐云。餓鬼也。餓五箇反訓
與飢同。久飢也。内典云。餓鬼和名加岐其喉如針不得飲水。

見水則変成火。とつり飢渇の人の憎む所なり。餓鬼とつの欲善
悪の気の主とするところ養分を神とし悪を鬼とし亦これ故なり倶
舎論頌に鬼は以月為日。以五百人間一月為一日。而壽
五百歳。とつへまた蛇足の辯ひまその妄なること尤甚し雲霧風
雷水火鬼神は画者悉これを画くるの雲霧風雷水火はその形
なるを知るこをもて妄なりとも鬼神に至て妄とも実にその
形なりと毋りつり左平記に載　天智天皇の御宇に孫愐云方とつの
ものあり金鬼風鬼水鬼隱形鬼とつの四つの鬼を使ひ作り好賀好
勢の両國これがために妨られて王化に頒ものの多し紀朝雄とつる
りの宣旨を蒙て彼國に行り一首の歌を綴て鬼の中へ送るその
歌　草も木も我大君の國なれば行くゝ鬼の栖なるべし四つの鬼とつの歌
をえて忽ちに去て失ひ千方勢を失ひて聽て朝雄

亦討られ〜とのつ是その鬼とのつの狐狸狐の燃と大を鬼共と
いへば狐狸の假鬼なり亦鬼大の気大なるれが息の夜のりのの
なれどさるの大を鬼共とのつの歌或の坂上田村麿勅を奉て鈴鹿
山の鬼を討とのつのよ〜妄なり叙の巻に亦云美田須の綱頼光弟
宝の美剣を帯て〜疾一條大宮へ使〜反橋より干て〜鬼のまを切るの
うて〜頼光その剣を鬼切と名ば〜とのつ或の反橋を羅城門とて
ひるるん世とのつの阿部晴明識神を使役し後その鬼を一條反橋の
上に封ず源頼光朝臣勅を奉て〜大江山に悪鬼を討亦の説あり夫
鬼神の形なれば何を討何を斬何を役ん鬼と人と
同じかへ縦透歌を詠るとも解とべ共の俗人とら詩
歌をたるべ鬼も亦決〜詩歌を感ずるとなれば〜とれを感ず
るのの悪鬼なへば悪鬼なへば人民を殘害なるべ 詩品

云。微一藉之以昭一告動天一地感鬼神莫近於詩。賢之が序に亦云ちるをもいまだ〜あつちをとどめ〜めるみえぬ
神をもあるれと世りいせをとと女のるをもあるべられのぬのを
をもるぐさるのの歌なり云られ詩歌の徳を美るへ其の實に
過られ天の左旋一日の右旋とのつの只理のとその動くや動ず
るやへのれをうてるるるなへば人の地上に立をりるたるるその地震
をたるるれども人〜これを動せるへるべ天地の固に動せるらどいら
ぐの鬼神を感ぐるへ詩歌をるる〜天地を動り〜鬼神を感ず
ひるるへるべ葉なが真龍を憎むに笑る〜世人なるへべ佳句秀歌を
憎ん曇なへる人なへいらり 歌ふ〜いはまてをとられ天地のう
ごんいぐ〜たるのの千古の人り〜世なへるるへべ貫之るのらど
絶倒なべ〜亦彼頼光朝臣綱に命ず〜羅城門に建る所の榜示今

の和京師の某の氣象とのの予近ところの檄を摸したる墨本一
幅を作りたるとれを閲するに疑ひ紅すもあるどその檄半折
ちその文全くさんざんに変化退治の告文にして不審有る墓録せ
を往昔の妖賊を鬼とも変化ともいふるべし世俗を真の鬼
なりとおもひたり物の醜悪強大なるものをもて鬼とのみ
本邦の古實狹草花に鬼百合鬼薊あり烟草蕃椒に鬼ころしの
名あり馬に鬼鹿毛あり剣に鬼切鬼丸あり軍書に鬼神と呼ぶ所の某生
を対ちりぬと軍陣に角鍔をる処あるをいんとも朝雄頼光の退治めく
は真の鬼にあらざるを知らん鬼切鬼丸の剣も亦ちるを鬼を切るとめ名
付たるものあり鬼百合鬼薊のいふ鬼の如し後人附會の説をなと
の羅生門は拾遺抄に羅城門に作る 横一丈 基半二尺 大行七尺 溝 ものどく注
ちり今人は羅生門と書きしられをちちりんと誤りちちのんと

嘱ふべんなり小世法物語宇治拾遺物語ホ
高元をさらせらくとあり らりんい僻説なるべしされど兼好が徒然
草に載たりし伊勢國の鬼のごの當時のへられをいのを眼前にくるも
のなりとぞかしと鬼とのいのべはは亦按ずるに神代紀に大神軻遇突智
の生るに至ては甚毋伊弉冊尊焦死て化去ものかくて伊弉諾尊
黄泉に入ることに共に結ものに膿沸虫流ることを怠に走て廻て
あの時伊弉冊尊恨て泉津醜女八人を遣て追留んとしのみと
ありこれ陰陽相別るこの義欲醜女い鬼女なり今世に大拝の御小鬼
面あるものをちることを大拝といのちるい醜女しみとめと通ぜ日本紀の
説伊弉冊尊を陰とし伊弉諾を陽とし又伊弉冊を鬼とし伊
弉諾尊を神とし安いとしとし信ず鬼神い陰陽死生の義し
○頼光の四天王ホがやい古今著聞集今昔物語ホよりえたれど平

季武平公時平貞道又材岡五郎平貞通（亦今昔物語に村岡五郎平良文とあれバ別人なるべし）と
ありて卜部臼井酒田など称するものハさらに綱がなかまにもあらず前太平
記といふものハうけられぬ説のミおほかるに近曾文人墨客
動もすれバ彼書を引用して故事を談ずるものありてうたてし
○鬼といふ字ハ人の名とすべくもあらねど孫子の時唐山戦国の時鬼谷子
あり亦義経記に鬼一法眼あり是も紀一なるべしと徂徠翁いへり又禄
のころ伊丹の俳諧師に鬼貫といふものあり是もその意をしるべし
○今東北の隅を鬼門といふ風俗通に東海度朔山に有大桃樹其下
有鬼門神荼鬱壘二神守之主領萬鬼といふハなりかし桃符桃
板も唐山の俗児なりん欤鬼門のことハ黄帝宅経にみえたり其説
陽宅陰宅無魂五虚四實等の目あり高廉が捐宅要説にいくらもて
葛孫の上葛孫を添へ昔人既に宅相を信ぜと東家の西ハ西家
の東なりとの一句よくその惑ふものを諭すに足らん
○昔ハ美女をさして鬼といひけり拾遺集に平兼盛へ、みちのくのあだちの
原の黒塚に鬼こもれりといふハまことかと綴るハ是も外面如菩薩内
心如夜叉の義なるべし然れバ兇賊を鬼といひしも準てしるべし

詩歌吉凶追考

壬生忠岑宣旨によりて春の歌奉りけるに雲のたなびく山とよ
めるを窮恒よと難じけりそのゝち世の中むかりけり（十訓抄巻二亦見于悦目抄俊頼髄脳云）
名称甚だしき類なるべし昔より出せるとも追考としてゆかしく

燕石雜志巻之二

[library seal]